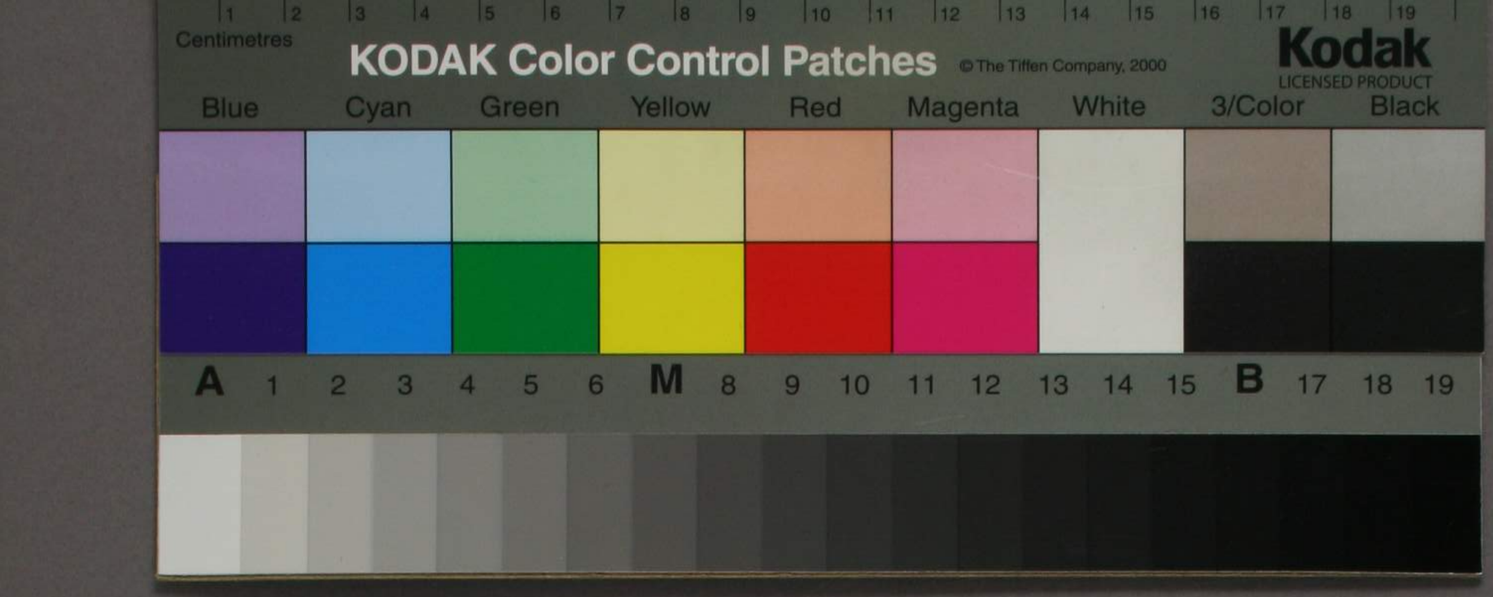
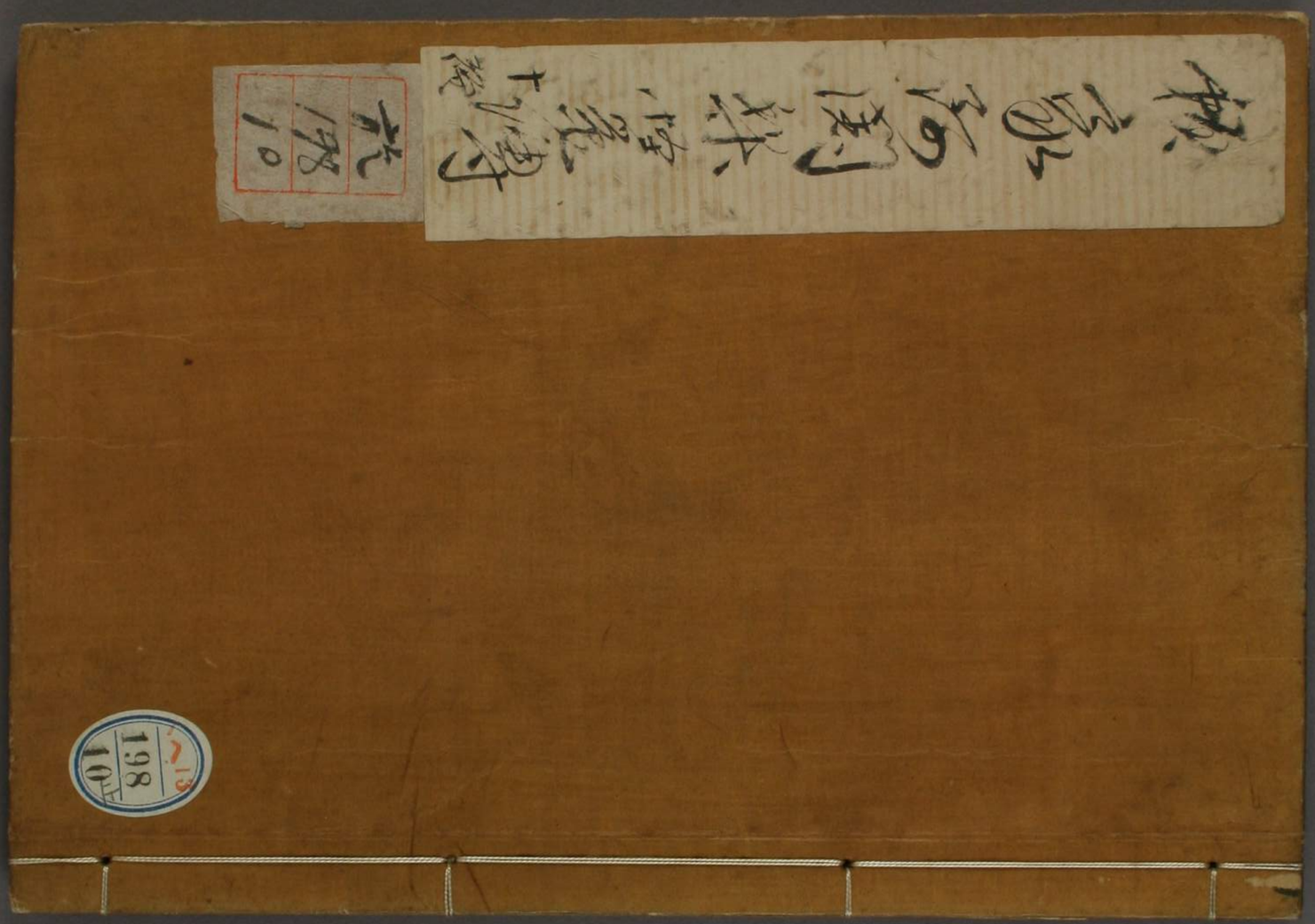

Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black



於
13
198
10

ホ唐糸を殺シも兎角榛沢六郎ガ
鎌倉殿へまうさんとて。ゆるし給ハず蒸禎の肉よ入りぬ。

第十八套

假を弄して大姫をだまし
明ル失ふて戔高さうふ空ク帰を

さても美妙ノ冠者戔高ハ頼朝公を狙撃ん為よ諸越ガ原よ到りて乞児
の群ガ入りかくて小童忠もそれを
誘ひ鎌倉ガ支配り。唐糸ガ環會よ。とうの中密よ飲びや働よ人ふを
をうえて。ぬすび呪文を唱ふび。奇うのうる。殿の帰忽然ことあらわれ出唐糸
を縛ふる鐵の鎖を斷ふて。唐糸ハ久ふく居縮ふる手足さく。醋のて
うのうこうあやまと号くども。つゞ矛をくりうえるふ追すて忙ふく縁頬よ
這登り。言語ハるくてゆゞ不覚よ目を押拭ひものうくしていふや。頼朝

命運高ゑんべ。計策うごゝ撃ちのし。ひびひろ生拘まそく。土の牢よ推籠ゝまゝ。そも活べくんぶ出の祝と。仍曹司のこゝふおくむやうつふ。今宵惹うを。恙うを。礼儀を拝しまる故しさを察ゝ。君今鎌倉よ帰入らせ申ふの何だろひろをくゞ。その友をゝゝ申へうと密申ふ人も。なき人や笑んとく。笑高ハ首をめゞゝ。彼此をえくうゝのやう。曩よ汝よ別まし浅手辛万苦を厭ハど。一味の兵士を招を集んとするふ勢ひ微みそくるやうべあゝ。ハ栗津ゞ原よ旅寐そ。猫間の族よ怪めゝまし。又あゝをハ鎌倉を徘徊して。重忠ふ謀らゝとのゝども。頼豪阿闍梨の神霊よ妖嵐の御を授られ生没自在うれべ。彼ホゞ為よ謀ゝ止ゞ。為久ホをゞ去年の秋箱根山ゝく首を刎。近曽ゑ児ととりて頼朝ゞ酒飲ませんとをよ。狙撃んと計投るふ。重忠晴夕。その家緋よ命ゞそれを営中よ誘ゝ却ちゝべる。

もそのこゝろふ物ありとおぼし。遮莫頼朝う首をゝんの今宵なあり。飲びひへと。密語おゝも。慥ハ高ハ目をゝく。ゑ高の母とう近くゝ。五七人。手ゝく燭を乗り。或ハ桃子土器を捧ゞちゝく前よさも。嬢子ハ犬姫のキーをゝこゝろ。ゝく。ゑ高の母とう近くゝ。ハ今ゝもおゝりゝく。姫君今宵ハ曹司よやゝ。そうひふの祐うゞ。ゝん今年の祝もおほそうなゝひふの痛しくゑんべ。霧ゆふ。娟夫の盃をこう結しまあゝせがるね在藻倉の武士よ令ゝゝしゝゝ。女房ゝちおのく千秋万歳一唱て。姫君を誘ゝ引まりねと速しくべ。大姫ハ名のそゝく。今宵えゞ死ゝ王冕を勧め。三三九献の式も果ゝ

良人の白 [illegible] 耻 [illegible] 月出て夜を爭ふと疑ふ。類の上お覆ふ羽のごとき鬢の黒くて匂ふるふ綿の袿綾の帶。留帯南の墨衣ろう [illegible] 沈魚落雁の容止美貌閉月の粧飾。かろ美人そ。い。稱なうぞく [illegible] 丈高し。望よき [illegible] 芳らど脇らど [illegible] 夜のまべ短くて。深うとの撞ゆめる花よ嫩子が耳を側そつ。莞 [illegible] 用意し。佐りうの。姫君ハる角おだ [illegible] 慰めひねと信じそく。

照る月を見るごとに、さすが男の心も慰むることぞなき。
さて面がてらおこせたち、掃守。長を秋も綾錦。ござるを風情あそこ
もかしこも勝をとるも君がめぐみも武蔵なる入間川とやらんまでも聞えぬ。
思ひぬと笑えーぐべその悲しみの数さえ。存命ぶーも必ずねど。ゑん容止
をも認めおきたし。被も果ぬ涙の磯ふ。弘誓の舟を待つがよ。なくらん後
も冥土みち。何をこうをよ名告あうんと思ふ。形見を手をうちち
歎くふもあをうこのうち。あうれふけーも不意。必ずしび絆ぶ頻夫の縁
ちへ。神と親との恵みこ。あうるのを四年が程。恨をまりぬることを恐
けよ。昔の頼さ。今の鉄ーさ。思ひうなひうぐ。玉椿の八千代そぐーりと。
言の葉をふ露だろうもゆえをしまうとう口説がうち点沢
堂ふ対が心操をいづぐ化よ思べそのの蔵ふ不愛ー。憑こやまる

密事あうう。けりりんや。と問ぐ大姫いかもあくどこの問のふやごくもたうべ。
百年のお山楽を共ふをる君が為あ。火もも入り。水ふ没るとも。八百万の神
をうけく。仰ふ惜ぐうー。と笑果てく莞然と。さう誓ひのうう偽こ
あじ案内こ。誓ーのくべ。又誰をふ。が又頼朝至今宵臥房へ案
内こくの。と密語ふじ。胸うち騒ぐ當惑よそ何ぬとも問
かねこ。さ情なく堅すぐ。美高ぐ声を低ー。驚ぬのふそ理
うう。縁由ふ委細ふ告どくもの。刃が又さこうが為ふ又の雙うるうか
こくちうそそおうとうぬ赤曇よ頼朝の需ふ夜ぐ。鎌倉ふ変り次
の二年の五月。入間川のほとりふ真の美高ふうぐ。唐うぐ対こうる。
後児ふ大太郎と申ぐうりのぐれふ代ぐ命を預せり。縛長安うれが今
全くぐえうとうふ及ぐ。美高ぬ未練一次を呑ふ涙るの志を稜さ

ぞ。彼へとそれへ城廓あり。出るとそれ
ども只顔頼朝を狙撃んとそれども
従兵ヨヲーの孤獨の刃ーてい。その
過ーとうおうれおれ刃不良墓せられ
ーる。方色時あり。父の讐あり共に天を戴ざる彼こと
うふまりてこの夜後過さんや。とう夫
さーのくとうちめんくーろ行
いさるところのくれども子とうくー父を
のこへ許ーのくとりせ二果ど眼を瞬ー。去ーべ只今ー誓ひ人ー言の
禁々何とうぞんー。かーのひとうひるを
去ーる悔ーさよ。夫婦の縁ーもう
うけくつと刃を記を良人の掌を。

重々ーべ一ととひい推辞ーうーう婦
うー。今宵案内去ーとんー。ヲヲ刃
も果ど扶声の蔭うー。そのうれ副
姫いうち驚をつ。その誰や。とヲ
去ーべ。ある何の行うう其外ふいめ
刃ーと宣ふ間ふ唐糸いそのほうう
ーる。れ曹司の寿御ーく。孫倉殿を
ふうを姫君の薙を両端ふうそ腰
ー。ーふ立のくべ。我高依然
ーく唐糸ふいふ申。汝その形容
ーく鞠入ーべ。直寝の武士ふ。性
ーうーうものあーん。人目の関を憚んあへ。

姫が往衣ふちくりのうへ。大姫そを脱
俟やうぐ乾ぬ袖ひとうつ。唐糸ふ被ひ
邦と打滅し主従三人密談めしと泉をおとやうく
更闌くて擔。廊室助鋪間毎くの寂とて。宿直の近臣熟睡せり。大姫
遥ふ指しく。彼処なる几帳の内にそ。ゴゲ又の臥房ありと。陽めをそ告うく
い戔高笑くて莞尓と。ちうとふ唐糸ふ
廻りり。脱出るやうもめとふ。髪とめ
應つ。姫を誘引雄ひる。廊をうち徒う。房の彼方へ階び入る大姫へ今
さくふ。をかぞうとえくうのくと。暗さ胸さえうち曇う。戻よちうと今え
ろうね。鐵行燈の下ふ主良人のうくもつがうる。風の前ふる燈光うう。跳
うえへ滅るのんとうとうーッふをうねく。

蒸襖をそとく開くへ入のぐ。戔高ぶー目送うそ。今いふ安ーとひうり
ごうぞをくく走り前くそ几帳の肉へ打入ぐんとまるおうう。朦朧とーそ立在
ものあり。戔るをふ投縁しく熟視まぐ彩氏夫婦ありそのとを彩氏い。
桟橋とくもふ戔るの左右ふ配る眼ー。曹司いそぐ。瞹ゆのはぞや。孫倉殿
の時運高大みうく。宿志を遂のひぐー。呂速ふ志を遵ーく。先君ろ
ゐん芒音挖を。吊ひのくうと。練ままぐ。戔る勅我うく大ふ怒う。女ホ生る
日へ。これと志を開ー。つぐ會誓の怨を雪る。草の原ううんつべー
と。誓ひつるあへ似げるう。まぞぐー。歌の時運を補ーく。練るへのふぞや。
これ今仇を報んる。瞬の中ふあり。其処退ぞや。と熊燥ぐ彩氏うさ
ねくまうとまう。君が言悞う。曩ふ平家。う母西海ふあり。宇内
擾乱の時ふく。仇を報ふうー。今や四海靖治ふなんぐ。人の之

孫倉ふ帰降を。彼ハ徳を布そ。民を安拊ー君ハ邪法をのそ。人を眩惑を。彼ふ智勇の士幸ー君ハ一臂の援ふの。加之。大姫君ふ逼そ。本意を遂んとーのみかやねふ不孝ふうや。のー果ーそ考うべ。その道理ふ搆ふど。大姫君。今夜復讐の案内ーのそとそん。君その妻を擄そー。又を教その大罪を犯ニなのみうべや。ゆーてハ神も衛のふうーありや。と悼るとろもるのー理を述るふ。戈高臥をうち揮そ。習ふ兄諫言ふる為戈保元ふ敗之ー乙。戈朝ふ又を棄その罪あり。安徳帝西海ふ没なひそ。頼朝又君な我ふるの罪あり。今順をのー逆を討。行の妨あるべそ。このそゃうをそ。弟頼朝ゆーゆんとそふ。彩民拽拉ー。ふ。猶ほ猛ー。苗ふべ。ふ嗚呼ー。と

焦燥つ刀を抜そ切そふ形ハ消そうのうう。戈そのさもうそー。笑ひ。枝ふる刀を含ふうの。ふーて。几帳のほとうふ走うおう。起よ頼朝又の仇を報ん為ふ。戈る来ふそそ拽方ふあう。起よそー。と呼び覚ー。几帳をさう切落せが。肉ふ臥しる人もるのー。薫籠ふ掛ー麻衣ふ。一首の歌を書ふうける。戈るハふ景迹ふ忽地望を失ひ。原来敵ふも防禦の術のう。

やうとそあらめ。と立ようそー彼麻衣の歌をうえれば。

夏来れバ伏屋ガ下ふ生ふる金の猫赫奕と光を發ち。餘光散徹ーそ戈そを射るとええー。奇ふるふる戈ふ。酒ふ酔るぞそ。跟ぃと

まさかど
たゞ花のゆうこん
ゆうれいのゆうこん
竹川正画

金猫
西ノ上人

ろく尻居ふ坐ー。一道の白気その懐よりち冲り。忽地殿の棟と化ー。西を指ー飛去ぬ。されば戈高ハ妖鼠の御破ぞく〳〵ぞ云ひ時よ宿寝の武士十人あまり。さくと声うけく驚ん。せうが戈する刃ふ驚ん受ん太刀内ー〳〵丁と砂まび。間ちくつー兵士両三人。首遠ふ飛び墮軀倒まろく血ふ塗る。残る兵士ハこれも怕ー〳〵と屍を跳こえく。打ちく縦横よ抱殺り。前後より當り戈ハ真額を砂割戈ハ腕を打落ー。猛勢繁然とそのその勇敢よ當るものなく。血ふ流ふてく屍ハ横ハりて累〳〵と戈高。抔る兵士を鑒ふてく。その後奥ふく〳〵と引入まび。西面ふる狭障子の内ふ人のけひをあり。これ頼朝ふのべー也。擬戈せど血刀ふ捉そく走り蒐まび。忽地内ふ声高く。

昔ふえー野中の清水ふりねどころび影ふ見ず岩び歩ふん
とうち吟じ。障子をさと開くれば。赤土と仆ふハあらぐ。ふとうの外僧捲ふ衣裳を脊負ひ。ふの一條の杖を突主悠然とーく主在ふる戈高をさー招ふ曹司。これを見ふりや。是裏の近縁ふる。栗津ふ籠ふ巷を帰び。志ー住ふるころ。ひ月。猫間光実ぬーと猫弟を編ー〳〵る夜端ふく面をあらー〳〵る。憑借入道西行ふりふ。貪僧奥州ふりふのぬくさ。えふ〳〵ぞもてふ来ふてぬふく〳〵び見ゆるものを見ふろ。ひ復讐の志ーそさふとふぐー。才曽最朝敵とうふく対とのへ。仇を報ふふふ臣。努ひとぐまりねー。とのハせも果ぬ。慈悲忍厚ふと昔とふる生家人ハ。勇士の志ふ卸ぐべよあらぐ。汝成敗ふ就ふ。ふ非を諭ぶる。その忘ざる俗子ふ教まろ。のぞその願功ふるちく。

息の根止んと。と罵つゝ。双をうち振うゝ砍らんとするが。光実正忠これを
あやと名告かけゝ。左右より出西行を推隔まゐが。薄手も一刀
を腰おゝく。疵雖九をう兒抱き夫の後方ふうそのとゝ
か刀の鞘を握りもつゝ。美高よりも剋し。彼往ふ栗津野ふゝ妖術を
りゝく形を隠しその後由井濱ふゝ。ゝぶ刀光を脱るゝとゝくども。家臣竹川
正忠が後児千江松が忠死ふゝく。家の重宝ふる。金の猫の睛ふ。千江松が
鮮血を塗うゝ。てふ振ゝく妖光の術を破りぬ。抑ゝぶ光隆い。美仲が
為ふ罪をゐゝ。憤ふ世を遂家令逐ふ凋落せり。美仲既ふ誅伏
もとゝくも。つゝぶ怨うる母堪ど。汝を撃ゝく復讐の志を果さんとゝ。恨の
双うけよと。ゝぶうゝ刀を閃うとゝ後方ゝく投が。美高打ゝくと咎。笑ひ。
ゐ兒光実が廣言ゐねる年由井濱ふゝ。及難ふふぐうじふ。その志ろ

切るふ放ち。教ゆゐ嫡ど。そゝく来斗さゝ押隔ゝゝえけれ。
憎さも憎ゝと。光実主従挟そゝ撃んとも。陪ふ東面うる正廳の
肉ろう。双方ともふ健ゝのふる藤倉殿の四壁近ゝ。重忠仰を受う。
まうをぐねのあう。と呼びうけつ。翠簾を巻揚まゐば。殿の燈燭
見ゑそろうゝ白昼のごゝく。上坐ふゐ前右大将頼朝卿。饗東ゝゝえ
なゝく。政子嬢子左右ふ侍り。重忠その傍ふあり。光実主従い。この光景
ふ怒を壓へ少ゝ引退ゝく。縁由を問んとするふ。美高ゝ。とゐ頼朝ぞさ
んうれと。會釈もせゞ跳ろうる双。重忠ゝく。身を起ゝく。速う当め。
曹司。既ふ石田を撃ゝく。復讐の本意遂ゐうふ。今又藤倉殿を撃
んとそうゐふる。更ふ道理ふ稱ど。又光実ねゝ。ふ。ふ曽殿威亡ろ後。
その子ろうとも。撃ゝく怨を雪んとゝ。ふうる惑ひなう。とま

保元名の合戦私の宿意ふうつ。又母の遺體を傷べきうう。去うりとのくども。望を下ふ志を折さぶこーうをりく義高ねーまう。鎌倉殿の狩衣を進くせ実ぬーあう。木曽殿の鬼を進うせ。彼義澄が故ふみ倣ひて。風志を果さーぬみとそ。これ幕府の覚仁大度。勇士を惜こぬふめくれ。おのくこれを刺う。云ひつも去ぬくうと述をろう。推うる狩衣を義高の母とうふさーみを鬼を光実ふ遁与ろう。義るこをこんとを。聴まう声をぬう立卑怯うう頼朝。ぶづう無恥よ倣うく脱まんとるとも。これ決ーく赦さび。この狩衣行くんせんと。罵もめくど。投くととくーあごまび。裏ろう物び生るりの。これ大姫の首うるう。光実も。この為体ふろう怪ーこ。伏うる鬼をとう記せび。又これ裡ふ唐糸が首級あり。ろうふ至て光実ハさうく義高も。ところあうめふ似ど。重忠莞尓として。件の二人ふ男し大姫君ハ孝と負とふ引をおとね。自害うく失ぬひーくが。唐糸も事の成ざるをうく自双ふ伏ろう。さるふようう。大姫君のふん首級ハ義高ねく進うし。唐糸が首ハ光実ぬく贈う。その子をめく又よ代ーし。その臣をめく君よ摸ふめ。まが彼義澄が。空衣を刺うるふ勝まろ。今ハ迷よ復讐言の志を発のくー。と発諭ふぞ。頼朝卿宣ふ。これ往ふ能頼義後をめく。義仲を討ーくるハ勅渡ふろうく。都下の愚劇を結んとそるふあう。豈その己ふ勝まるを違く。親族を殺らべこ。去るふ義仲ハ却教を凝ひ。唐糸が子。大夫卿と申らんを義るうう。と偽りこーらく。鎌倉く来せうの。これそを猜ーろうこをりて

西行

そん沢六郎

石田爲久が清お任一我高を娶一ると真の義ると云ふ
頼朝を仇と狙一ると云ふ
うぅ。ぅぅで私の怨お當ん又光実の愁訴空ふこーあり。今度義ると妖
気の術を破ると功をあらく奏聞一。玲稚丸お猫間の家を継一官禄旧
のごく安堵せろべ一玲稚成長まるぐ光実これが後見をいさ一正忠夫
婦。いろ一忠節を励へ一といと信ふ寛ふお。政子四前お忍がお縁。涙
を袖お裏うね。大姫ぶ命を隕一くく。命乞せ一公操を憐こあり。義高
ま毎一志を報一そ一。一家の親を招一光実も又唐兵が忠死お愛こ。
怨を散一なくとひろけこ又法沈こあく。嫩子も目をあべこと。大
姫君をろふ臨こ。呂恥一たお四年が祝真の良人をいさ一ど」て恋慕ひ
ねろん。唐兵が子お大太郎とふりのこと今れはこあ羊来の節操も化

おろうろこ。と宣ひせ一ぬこと。推量らるこ痛一。ろうれに祝べ。西
私も。又言葉を揃一と。呂彼を
息一。ろふ云石ふのんべ。狗こ
の意ろふぞや。と問よ。光実も又嗟嘆一。げふいろうこと理あり。いざりろ
ろうふと疾つ。刀を抜こ鬼の鍾をだろうこんと切ころのち葬を刀尖ふ
ほうふねこ。るくさ一のげ。歌の前ふ
忠夫婦をえろ一ぶ。正忠薄声をあろ一こ三ぶ凱歌を揚ろる。
そのとお笑こも。刀をろうく狩衣ふ数回刺徹一。刀尖をろうの得一ん。
両の目子をろり出一。流こ血を狩衣あく押拭ひつ。声を励一そのかう。
始あろうく終こ兄ふ大丈夫ふあ一ど。ろろ眼あるべろそ。頼朝をえるなれ。
再見ふ頓悟の奴今脱離一こ。ろん入間川の上よあろし

ろう。唐糸が子大太郎と曰ふ。假目暗とるりうやぶりくが緯のそこなふ。
前蒙みくありくんうくされば今ようくる。琵琶和琴を彈覚の友とう
為報恩者行氏夫婦が死後の疎も。ふ逢ひの門を開く。善い口織
みてくありける。南无阿弥陀仏と唱まふ。西方法師前ふ對くる我
高ぬ〻れ渡ふ。導師とのうんも鳴呼るれど。大姫いのもさくく。唐糸
彩氏夫婦が為ふ。うぐく回向し進うべしとく。掛る袈裟を脱ぐ。
三ッの首級を裹こ。遂ふ我高を扶りく。近江る栗津原ふ卧ね我
仲の墳の傍ふ両の首を埋葬し。舊住る草菴を我高入道ふ
与へ。我高いとふ彩ひまうく。猶くふ交くふ。光實い玲雅丸
そのふ正忠夫婦をねく。治ふ秘くのぼりう。賴朝卿徽由と姿ぬり

けるべきうのち勅免あつく。玲雅丸を猫間の家督と定まる。光實ふ住
う。四位の少将ふ昇進くく。その家永く繁昌せり。ゆくく賴朝卿ふ。賴
豪阿闍梨の昊を。伊豆國下田の近郷。中ノ賴村とのふ郊ふ祝ひ祀り。一社
の禿倉を建く。子聖權現と稱北條時政ふ仰く。春秋の祭礼懈るこ
るく。抑彩くひけまば彼悪昊殊ふ崇をるのぐ。却源家の守護神
とのうんとく。祝ぎ多ふこそうとぞ。今見ふ豆州中ノ郷の張ちる子
聖の神これるう。その祢餅を忌嫌ひのかくく。中の眼一御ふ年のをう
ふ餅を揃ぎ。元日ふ焼飯ふ書茲をろうめく。義とて雑煮ふ代ふ
のまごその徴故をちくぎ。

評ふ云。世ふ伝ふ悪七兵衛景清。賴朝卿を狙撃んとるふ支るり
ぎ。賴朝卿その精忠を憐こんよ将去をゆうて晋の陵襄が故ちの

貓五德

揮塵新譚 萬壽寺ニ有リ彫師者。善誰當對客ニ貓踞其旁ニ彫謂テ客ニ曰。人言ヒ雞ニ有リ五德。今吾此貓亦有之。客問フ其說ヲ曰。見鼠不捕仁也。鼠奪テ其食而讓之ヲ義也。客至設饌ヲ則出禮也。藏物雖密能竊食之ヲ智也。毎ニ冬月入ルニ竈ニ信也。客聞之ヲ爲ニ之絶倒ス。明麻城王兆雲元禎筆記

女二宮貓

源氏物語若菜上 れ儿悔もおぼえけるくもりつゝ人けちく
ろうたくそゝめる。めうとねこのいとうひさく
なとおひつゞきてあそぶ。人くをびえさうだてそよ
そよとそよろをさゝふけひどもさるのかとるひみ
いやうく人のもろうねこつなのとうけまのんふ
ろをぶんとうちふりどぶみをのそぐ

ふ凝と景清空衣を剌目子を
これを日向匂當と号するのくり
そど。按ずるふ東雛ふ建久三年正月廿日平家の侍上総五郎兵衛忠
光魚鱗を眼上ふ覆。左の眼。旨るどくみて。前幕府頼朝を狙ひ
射んとをゝ古文ふ六連の海辺ふ乗首をゝこのゝえ
うり。景清ごろのこれふ周く縋り殺ら根ふ言ふ。戈高のゝも
ホこれふ准くゝそゝべうん
ホのふこの書をゝく雛劇の赴を写しゝ方ふ游戯三昧の筆力を
振くり。後その右ふを問。不経を笑ふ人ハ史傳を読ふ過を何ぞ
小説とするふ足とんや

頼豪阿闍梨怪鼠傳巻之八後編下冊終

ひとつの不老人もるし。右諸書ノ意ヲ案ニ（ニ）ソノ（ノ）ヒトツ（ツ）又（又）若菜下（下）うちのけはこのめまさりひとつ（ツ）うつる。ほととぎすの（ノ）ひとこゑ（エ）ふたこゑ（エ）ふるほどの（ノ）ほのかなる（ナル）ほど

がやくくとうめんするをそとうかゞふこと一日ばかり。

倉廩鼠　史記李斯傳　太倉之鼠。飽食而不驚。厠下之鼠。穢食而畏人。

社鼠　爾雅翼　管子曰。社東木而塗之。鼠因往託焉。燻之恐敗其塗。灌之恐敗其木。此鼠所以不可得殺者。以社也。

鮑鼈　前漢書東方朔傳　警猶鮑魚之臭。狗　今按　本草綱目　時珍曰。鮑鼈音勿青。似鼠而小。卽今地鼠也。○又爾雅說文。有鼈鼈。鼈。鼈鼈。八鼠。皆無牙。證。

鼯鼠　三輔決録　漢光武得竇攸曰。鼯鼠小鼠也。我俗呼為波逼可。禍須微者是。

鼠量　書言故事　飲酒辭量窄一升鼠量。

鼠牙　詩行露　誰謂鼠無牙。何以穿我墉。又　相鼠篇　相鼠有齒。人而無止。人而無止不死何俟。

鼠腹　莊子逍遥篇　鵷鶵巢於深林。不過一枝。偃鼠飲河。不過滿腹。

鼠膽　酉陽雜俎　鼠膽在肝。活取則有。

褰鼠　五雜俎　安息香能褰鼠。其烟白色。如縷直上不散。又狼糞烟亦直上。故烽燧用之。

投鼠　賈誼策　諺曰。欲投鼠而忌器。鼠近於器。尚憚不投。恐傷其器。況貴臣之近主乎。

鼠技　荀子　鼫鼠五技而窮。舊注　技才能也。五技謂能飛不能上屋。能緣不能窮樹。能遊不能渡谷。能穴不能掩身。能走不能先人。

鼠狗　太平記　白河ノ御宇ニ。江ノ帥匡房ノ兄ニ三井寺ノ頼豪

僧都トテ。貴キ人有ケルヲ被召。皇子御誕生ノ御禱ヲゾ被仰付ケル。頼豪。勅ヲ奉テ。肝膽ヲ砕テ祈請シケルニ。承保元年十二月十六日。皇子御誕生有テケリ。帝感悦ノ餘ニ。御祈ノ勸賞。頻ニ依請ト被宣下。頼豪年来ノ所望ナリケレバ。他官禄一向ニ是ヲ閣テ。園城寺ノ三摩耶戒壇造立ノ勅許ヲゾ申賜ケル。山門又是ヲ聽テ。歎状ヲ捧テ禁庭ヘ訴ヘ。先例ヲ引テ。停廢セラレント奏シケレバ。無カラ三摩耶戒壇造立ノ勅裁ヲ被召返ケル。頼豪是ヲ怒テ。百日ノ間髪ヲモ不剃。爪ヲモ不切。爐壇ノ煙ニフスボリ。嗔恚ノ炎ニ骨ヲ焦シテ。我願クハ即身ニ大魔縁ト成テ。王體ヲ惱シ奉リ。山門ノ佛法ヲ滅サントゾ思念ヲ誓メ。遂ニ三七日カ中ニ。壇上ニシテ死ニケリ。其怨灵。果メ邪毒ヲナシケレバ。頼豪カ祈出シ奉シ皇子。未御母后ノ御膝ノ上ヲ離レサセ給ハデ。忽ニ御隠レ有ケリ。其後頼豪カ亡灵。忽ニ鐵ノ牙石ノ身ナル。八万四千ノ鼠ト成テ。比叡山ニ登リ。佛像経巻ヲ齧破リケル間。コレヲ防ニ無術シテ。頼豪ヲ一社ノ神ニ崇メテ。其怨念ヲ鎮ム。鼠ノ禿倉是也。盛衰記ホ同シテイヨ〳〵ク〳〵ワシ

一竹塚（盛衰記）清盛左衛門ノ佐タリシ時。大内ニテ。鵺ノ聲ヲナス化鳥ヲトル。是モシユウト云モノ也。モシユウハ鼠ノ唐名也。博士ノ占ニ。清盛取止ルコト吉祥也トイフ。南臺ノ竹ヲ召シテ。中ニ籠テ清水寺ノ閾ニ埋ラレタリ。御惱ノ時。勅使立テ。宣命ヲ含ル時。モシユウ一竹ガ塚トゾフ是也。摘要

鼠賊 去まが鼠賊ぶどもの乙子を七郎とうやまをもうその後るるぐ。大ねう小ねう云云 前編の巻端よりの筆乃賊を出せり。もろもろ傭書 悞ろく。新左衛門の一條を脱落をゝ又

月令 お。田鼠 化為「鴽」前編二。鴽を鷹よ雛かのゝ悞りぐ。

鼠種類最多 鼬鼠 又 田鼠 鼹鼠 並同 隠鼠 並同 偪鼠 又 鼠毋 鼷 並同 此餘有 鼫鼠 竹鼠 土撥鼠 黄鼠 貂鼠 鼬鼠 食蛇鼠 鼯鼠 今不能悉注焉。書肆豪棄之綺梓太急也

文化五年戊辰正月

著作堂主人再録

作者
画匠
總評
傭書

曲亭馬琴
蔦葛飾北齋
東園魁蕾子
鈴木武笥

○曲亭主人著編目次 書肆仙鶴堂綉梓

復讐奇談稚枝嶋	全五冊	
天竺徳兵衛異録	全十冊	
墨田川梅柳新書	全六冊	
頼豪阿闍梨悋鼠傳	前編五冊 後編三冊	

俊寛僧都嶋物語

飯台曲亭先生嘗所著之稗史多種文思奇絶義理深妙本房毎歳得其所著綉梓擇良工先生家號瀧澤名解字瑣吉別號著作堂亦稱簑笠隱居世人呼爲馬琴子以風流文采見長賜顧君子認印記勿悞

小林近房欽白

全六冊　此草紙二ノ十二月ノ出

綉梓書肆

江戸通油町鶴橋

文化第五載戊辰十月吉日發販

傀鶴堂

鶴屋喜右衛門